



メーリケ

画家ノルテン シュツットガ
ルトの皺くちゃ親爺

ケラー

三人の律義な櫛職人 馬子に
も衣裳 幸運の鍛冶屋 ディ
ーテゲン 仔猫シュピーゲル

手塚富雄・熊井一郎・堀内明訳

世界文學大系

79

筑摩書房版

世界文学大系 79

メーリケ

ケラー

昭和39年12月10日発行

訳者代表 手塚 富雄

発行者 古田 晁

発行所 株式会社 筑摩書房

目次

メーリケ

画家ノルテン

手塚富雄訳 5

シュツットガルトの皺くちや
親爺

熊井一郎訳 241

ケラー

三人の律義な櫛職人

堀内明訳 289

馬子にも衣裳

堀内明訳 311

幸運の鍛冶屋

堀内明訳 333

ディーテゲン

堀内明訳 347

仔猫シュピーゲル

堀内明訳 376

無垢の美

ゴットフリート・ケラー

解説(メーリケ)

(ケラー)

年譜

装幀
庫田
發

A
宮下・ゲ
・健一
三訳
ス

R
堀内フ
明訳
フ

手塚富雄

堀内明

429

422

415

407

397

メ
ー
リ
ケ

画家ノルテン

第一部

明るい六月の午後の日がこの首都の街路を照らしていた。すでに初老に手のとどいた男爵ヤスフェルトは、久しぶりで画家ティルゼンを訪れるのだった。彼のせわしない足どりから判断すると、きょうは、よほど特別な用件らしい。画家は、食後はいつもそうであるように、年若い夫人と共に、雅致と簡素とを兼ね備えた小じままりした客間に彼を迎えた。その部屋の古風な飾り付けは、現代風な日常の調度と、はつきりした対照を示しながら、この上なくよく調和していた。最初はにぎやかにあれこれの話に興じていたが、そのうちに夫人は家庭の用事で座を立って、紳士ばかりがあとに残った。

男爵はゆったりと安楽椅子に腰かけ、脚を組みあわしていた。そして右手で頬を支え、談話のとぎれたままに、画家の顔を親しみ深い様子でつくづく眺めながら、この画家の作品について昨日以来彼の胸を占めている新しい見解を

もう一度反芻^{はんそう}しているらしかった。

「ねえ、きみ」と男爵はどうとう口を切った。「なぜわたしにわざわざここへ出かけて来たか、ざつぐばらんにいってしまおう。つい近頃ツァーリン伯爵家へ行ったらさ、わたしはそこで一つの絵を見たのだ。幾度も幾度も見て、それでもまだ堪能しなかった。わたしは誰が描いたのかと尋ねた。伯爵は当ててみると言う。わたしは考えて『ティルゼンだ!』と叫んだ。——しかしそう言いながら思わずまた頭をふった、ティルゼンじゃあるまいという気がそれと同時にしたからだ。わたしはもう一度『ティルゼンだ!』と言った。しかし重ねてまた『いや、違う!』と叫んだ」

この言葉を聞いたとき、一抹^{いもまつ}のただならぬ色^{いろ}が画家の顔に浮かんできた。しかし彼はすぐその表情をおしかくして、上々の機嫌で訊ねた。

「いやはや、わたしの貧しい画筆^{えがふで}の業^{わざ}だということを二度までも否定されたその傑作^{かく}というのは、それはいったいどんな作なんですか」

「いや、しらばくれちゃいけない」と、老人は心から悦ばしそうな表情で目を輝かしながら立ち上がった。「わたしがこの絵の話をしているのか、きみにはちゃんとわかっていくにせよ。ツァーリン家の主人はその絵をきみから買いたったのだ。そして彼もきみがその絵の作者だと保証しているのだ。いいかね、ティルゼン。」

そう言つて彼は画家の手を取った。「いいかね、わたしは肚^{はら}にあることはなんでも口に出してしまふ性分だ。それに自分では気がころがわかつ

ているつもりの相手に、あんまり用心深いものの言い方をするのが、いやなのだ。だからきみの絵を見たとき、わたしがどんなふう感じたか率直に言ってしまったのだ。あの絵にははつきりときみの芸術の多くの特徴が表われている。特に色と、細部の美しさ、それにまた背景の風景に關してそうなのだ。しかしあの絵にはまた、——いや、まだどころじゃない、それは今までのきみの制作とはまるで違ったものなのだ。そしてわたしはこの絵に、今まできみに幾分欠けていた或るいくつかの特徴を発見して、勝手に違つてまごつきながらも、驚嘆して目をみはった。そのことをわたしは告白するが、それは裏

を言えば、実はわたしがきみのいままでの作品にたいして或るあきたりなさを持っていたということになる。その気持は、いつもきみがわたし自身の口から聞いていることだ。もつとも一方、なんと言つたつて、わたしがきみを独自の優れた芸術家と見なしていることは、きみのちゃんと知っていることなんだが。ところがどうだ、今度わたしの見いだしたのは、大胆極まるすばらしい人物の布置だ、画面の隅々にまで溢れている自由さだ、それはわたしの知っているかぎりでは、きみがかつてまだ世に示したことがないものだ。また、わたしの目にどうしても解けない謎として映つたのは、その着想のいちじるしい変化だ、題材の選択の変わり方だ。特にそれは、まだわたしが話に持ち出さなかつた二枚のスケッチについて言えることだ。ほら、きみが伯爵に、油絵に仕上げると約束したあの

スケッチのことだがね。そこにはまったく特殊な空想がはたらいている。非凡で、夢幻的で、奔放な所もあるし、いい意味で珍奇なのだ。わたしはそれを見て幽霊の奏でる森の音楽と、月の光と、恋の橋となつた巨人の夢を想像したよ。ティルゼン！　ほんとうにこの秘密をわたしに明かしてくれたまえ。いつこんな大きい変化がきみに起こつたのだ。この変化をきみはわたしにどう説明してくれるのだ。ティルゼンが一年半というものの少しも絵筆を手にしないで、みんなそれは世間の誰もが知つていたことで、みんなそれを惜しんでいたのだ。きみがふたたび仕事にとりかかったということ、どうしてきみはこの二カ月のあいだ一言半句もわたしに打ち明けなかつたのだ。きみは人にかくして描いていたのだね、わたしちをあとと言わせようと思つたのだね。そしてほんとうに——ああ、親愛な不可解なわたしの友人！——それはきみの思いどおりに成功したのだ」

そこまで言つてこの熱烈な話し手は、無言の聴き手の両肩をむすづつかんで揺さぶりながら、顔には笑みをたたえ、ほとんど画家の目のをのぞきこまなばかりにした。

相手のほうは落ち着いて、しかし微笑は失わずに答えた。「ほんとうにどう申し上げたらよろしいか、ただお言葉を不思議に思うばかりです。わたしにはいつこう合点が行かないのですから。わたしはそんな絵やスケッチを描いた覚えはなし、またおっしゃることが少しもわからないのです。ツァーリン伯爵のいたずらですよ、

よせばいいのに。こうしていても、あなたとわたしとお互いに妙に気まずい思いをしなければならぬじゃないやありませんか。あなたはわたしに相当しないせつかくの賞讃を撤回せねばなりませんし、あなたが今は満足してもう帳消しになつたとおっしゃる非難は、やっぱりこのわたしに頂戴したままではあるわけですから。けれどわたしたちの間柄でそんなことはなんでもありません。わたしは、男爵、いつまでも変わらぬ親友です。けれどお願いします、今おっしゃった作品がどんな種類のものなのか、もつとはつきり話してはいただけませんでしょうか。まあ、とにかく席にお着きになつては——」

ヤスフェルトは、この画家の言葉を、前半は口を開き気味で、ほとんど息もせず傾聴していたが、その後半になると、せかせか室の中を歩き出した。さて急に立ちどまつて言つた。

「あのツァーリン伯め、してやつたな！　もしあの人が、——だがどうしたつてそんなことはない。わしは天使の軍勢を向うに回しても、きみがあの絵を描いたのだと主張する。ほかに誰が描けるものか。またきみが部分的に筆を加えたのだとも考えられない。きみは今までひとの作品に手を藉したためしはないんだから」

画家はふたたび問題の作品の細かい説明を懇願した。

「よし、ではきみにたいしてきみ自身の作品を説明することにしよう、きみの切望なんだから」と老紳士は椅子に落ち着いて説き起こした。「しかしごくかいつまでやるよ。もしわたしの

説明にまちがいがあつたら、即座にきみが訂正することだ。——それはニンフのところへ、半獣神が一人の美しい少年を小舟に乘せて連れて来た場面を描いた油絵なのだ。ニンフは、左側に描いてある海中のいくつかの岩と共に、この絵の最前景をなしている。彼女は小舟の縁に、しっかりと寄り添うて、腰まで水に浸つた身体を前にかがめ、腕を開いて、彼女の欲求の美しい対象を抱こうとしている。ほつりとしたからだつきの少年は怖れの色を浮かべてからだをわきへそらしている。しかしわれ知らずその一方の手を彼女のほうにさし伸べているのだ。抵抗しがたい力で少年を惹きつけているのは、主として彼女の声の魅力らしい。なぜなら彼女の口は優しくなれば開かれており、それが彼女の燃えるような服差とびつたり一致して人の心を掻き擾すにはおかぬのだ。まさしくそこにわたしは認めた、きみの筆触、きみの色彩、模倣しがたいきみの思ひ書きを。ティルゼン、だからこそわたしはきみの名を叫んだのだ。ニンフはほとんど横顔を見せているだけだ、前にかしいだ背と一方の乳房とが見えている。ブロードの濡れた髪はたとえようもなく美しい。波の谷間からわずかに彼女の魚体の鱗がのぞいている。そのまぢからから緑の水を撃ち開いて尾が現われている。しかし人体のほうの美しさのために、この異形は少年の目に入らないのだ。彼はただあてやかなその顔の魅力に魂を奪われているのだ。彼は自分の軽やかなハンカチが風にとられていることにも気がつかない。それはいまわず

かに彼の肩の上部にまつわっているだけで、細い帯のように空にはためいている。しかし非常に重要な意味をもった人物は、この光景の傍観者としての半獣神なのだ。筋骨たくましいその姿は權にもたれて、船中の少し片寄った所に立っている。すくんと身を起こしているのではないが、他の二人より図抜けて高い。無言の激情が彼の相貌に現われている。彼はニンフに、彼女の愛するこのたいいけな美少年を掠奪して来てやって、彼女への献身を示そうとしたのだが、彼女にたいする彼の激しい愛は、今や思いがけない嫉妬の念によって彼を罰しているのだ。彼はいつそ怒りを爆発させて、この光景に背を向けたと思う。しかし自分を制してじっと静視している。そしてそこに苦いよろこびを味わおうとしているのだ。全体は実にもごとくに渾然と描かれている。そして賢明にも画家は、右手のほうの、小舟の空虚な一端を、高い海生植物の蔭にかくすことを心得ていた。その他は一面に海の遠景だ。そしてわれわれは、画中の人物と共に、この境域の孤独さと覆いがたい無気味さの中に包みこまれてしまうのだ。きみ、わたしはもうこれ以上言うのはやめる。きみの落ち着きはらった顔つきは、きみがその絵を、十分承知していることを物語っている。しかしきみは、怪訝の色は現わさないにしても、このきみの作品にたいして当然もってしかるべき誇らしさを、少しぐらいは見せてもいいではないか。もっともその無関心な様子そのものが最高の誇らしさを示しているというなら話は別だがね」

「で、スケッチのほうは？ よろしければお話しください」と相手は言った。「それはどんなのです。お話を聞いてわたしはすっかり好奇心を感じました」

男爵は、すばやくひと息入れ、微笑した。しかしすぐ真面目な面持になって言いはじめた。「ペン画で、かなりの程度に水彩がほどこしてある、きみのいつもの流儀だ。その一枚はわたしに深い印象を与えた、特にわたしにそれを二度目に明るい場所で見たとときは、ほとんど戦慄に近い印象を受けたのだ。その題材は要するに、音楽好きの幽霊の夜の集會といったようなものだ。画面は多少丘めいた森なかの草地で、それは一方を除いて、まわりを樹木で囲まれている。樹木のない右手には、低く沈んで霧の中に光っている平野の一部が遙かに眺められる。それに反して左手の前景には、濡れた岩壁がそばだつていて、下にはいきいきと泉がわき、岩壁のえぐったような凹みにはゴシック風の裝飾をほどこしたあまり大きくないパイプオルガンが据えられている。それに向かって、苦むした石に腰かけて演奏している女性がすぐ目を惹く。これが主要人物なのだ。一方、ほかの者たちは、あるいは物静かにそれぞれの楽器を奏でながら、あるいは小さな踊りの環やまどいを作りながら、あちこちに散らばっている。これらの奇妙な存在は、たいがい裾を曳いた衣服に身をつつみ、その裾をわずかに上へからげ持っている。衣服は灰色かその他の目立たぬ色だ。死者たちの顔はみな蒼ざめているが、中には非常に端麗な面

持もまじっている。ものすごい容貌はほとんど見当たらない。肉も皮も失せた醜い骸骨などはおおさらのこと。これらの死者の群れは、彼らしい娯しみを求めて、ほど近い墓地からここへ出かけて来たのにちがいない。つまり右手にある礼拝堂でそれがわかる。その礼拝堂は少し離れた丘の下にあるのだが、建物は半分しか見えていない。前面の、墓地になっている丘でさえぎられているのだ。その丘の上には古い大理石の十字架が傾いている。そのほとりに陣取って笛を吹いている一人の幽霊がある。その様子が注意を惹きつけずにはおかぬ。きちんとした姿勢で着物には折り目正しい襷がついているのだよ。だが例のオルガンを弾いているあの美しい女性に話を戻すことにしよう。それは気高い乙女なのだ。頸を深く垂れている、彼女は自分の調べによりも、より多く、足もとに溢れて流れる泉の歌に、耳を傾けているらしい。魂に充ちたその黒い目は、心内の深い霊の生活に没入していて、夢のようにその消息を伝えるばかりだ。その目は何物をも見つめていない。鍵の上にも、彼女自身の美しいふくやかな手にも注がれていない。物悲しい微笑が、あるかなきかに口元に漂っている。そしてその様子は、この霊は今この第二の仮象の生活からも離脱する可能性を思ひはかっているようだ。オルガンにもたれて一人の青年がまどろんでいる、目は閉じ苦悩の面持をしているが、手には炎々と燃え立つ松明を持っている。一匹の大きい金褐色の蛾が彼の捲髪の前側にとまっている。岩壁とオル

ガンの箱との間には死神がいて、ペダル踏み役をつとめていろいろらしい。骸骨になった骨太一本の手と片方の突き出した足とが見えるから画面の中景の人物のなかでは舞踏者の群れが特に際立っている。つまり二人の強壯な男子と二人の女性とが、施物を高く捧げて美しい巧みな舞いを舞っている。そしてときにはそのあらわな肉体が、美しく高貴に洩れ見えることもある。しかしその舞踏の調子は緩やかで、それを舞っている人たちの厳肅な、ほとんど悲しげな面持になつてゐるものであるらしい。この群れの両側と、そしてもっと奥まつた所には、陽気な愉快な場面が展開されている。いろいろな快活な光景がある。なかにはそれがおどけにまで昂じてゐる。特にわたしの目についたのに、こんながある。一人の男の子の骸骨が、軽い緋のマントを着て坐りこんで、ひとに靴を脱がせてもらったのだ。ところが脚が膝の所までいっしょに取れてしまった。そしてこのしくじりに死ぬほど大笑いしているのだ。またこんながある。その例の笛吹きそばに小さな繁みがある。そこからぬつと瘦せた手が出て鳥の巣をさし出している。一方、一人の老人がかがみこんでさつそくその巣に蠟燭を突きつけ、小さい男の子に、一羽の鳥の怪訝そうにばかり見開いてゐる無邪気な目を、のぞきこましている。その男の子は、そのほかにもう、羽をばたばたさせてゐる蝙蝠を一匹手につかんでゐるのだ。こんなような場面がいくつもある。全体としてもまだ言うべき点はいくらもある。明暗の配置、月光と蠟燭の

光との不思議な交錯、それらはこの絵がいつか油絵に仕立てられたら、特にそれが緑に与える効果のために、この上ない美しさを現わすだろうが、それがもうこのスケッチの到るところで立派に暗示され、十分な自覚をもつて取り扱われている。しかしもうおしやべりはたくさんだ。そもそもしつさいの説明がよいのだから——

ティルゼンはしばらく前から放心の様子で、椅子に掛けたままじつと考えこんでいた。さて男爵の話が終わつたので彼はわれに帰つた。と燃えるような額とともに椅子からふいに立ち上がり、思いきつた調子で言い放つた。

「そうです、男爵、あなたのご覧になつた絵は、わたしの手になつたものだとし上げることができません。しかし——ここで彼は無理に声をしぼり、大きな笑いを爆發させた。

「ありがたい」と男爵は有頂天になつて跳び上がりながら、彼の言葉をさへぎつた。「それでわたしにもう十分だ。さあ、きみを接吻させてくれ、抱擁させてくれ、親愛な友！ きみがパレットをからからにさしておいた一年半の断食期が、きみの身に奇蹟を突らしたのだ、新しい季節を開いたのだ。その成果を見て世間はびっくりするだろう。さあこれから一撃また一撃と進むのだ。いいか、きみ、いまやきみの芸術の新しい強い、春の泉が噴き出したのだ。そして今わたしはここにきみの溢れんばかりの名声を予言する。その名声はおそらく数百の人間を鼓舞して、その全心全霊をこの崇高な芸術に注がせはるだろうが、また数千の人間を嫉妬と意氣沮喪

に追いこんでこの芸術を断念さしてしまふにちがいない。ああ、きみは謙遜な心の持ち主だ、きみは感動しているね。この幸福な瞬間に固く握手を交わして二人は別れることにしよう、そしてもう何も言うまい。わたしはこれから伯爵の所へ行くのだ。ではご機嫌よう、また。」

言つて彼はもう扉から外へ出て行つた。

画家は身じろぎもせず彼を見送つていた。今こそ思いきつて男爵のあとを追ひ、何もかも打ち明けてしまおうという気持ちに駆られた。しかし自分の意志ではどうにもできないかたくなな心が彼の足をその場に釘づけにしているのだ。こうしていつまでもおし黙つていたが、しばらくたつて彼ははじめてほとんどせつないような微笑を洩らして、次のような言葉を発した。

「ああ、善良な人、すっかりだまされて走つて行つた！ どんなにあなたはわたしのために無駄な歓声を挙げたことだろう。また悪気もなしにどんなにわたしにわたしの弱点を思い知らせてくれたことだろう。わたしは、わたしのものとはならない他人の受くべき賞讃を、耳を傾けて聴いていなければならなかつた。そしてその賞讃の言葉は、一句一句、真の絵描きとして現在のわたしに欠けているもの、また永久に欠けているであろうものを、わたしにはつきりさしたにすぎなかつたのだ。なるほどそれは事実だ」と彼は頭の中で思いつづけた。「ああいう構図を仕上げたのはわたしの筆だ。そしてそれは全体としてそんなに悪いものではない。それはあの着想にほんとうの値打を与えることに役

立っている。わたしは手を入れなかつたら、おそらくあのあわれな素描家のスケッチは誰からも無関心に見過ごされてしまつたらう。しかし、わたしの精神が強められいききとした感興を獲得したのは、彼の精神の跡をたどつたからだ。そしてさらにあの精神に鼓舞されたからこそ、わたしは今まで到達したことのないあの表現の高みに登ることができたのだ。この無名の素描家にくらべては、わたしというものは自分の目にさえどんなに見すばらしく取るに足りない存在と見えることだらう。あの線、あのデッサン、あの構想を創造する才能を得られるものなら、今までわたしの仕事に対してわたしの受けていた賞讃のいっさいを、わたしはどんなに喜んで放棄してしまふだらう。彼には一本のクレヨン、一枚の粗末な紙があれば足りるのだ、このわたしを倒すには。もしもあの紳士たちが、自分たちの嘆賞しているのは、一人の気違いじみた男、一人の見すばらしい零落した人間の作だということを知つたなら、彼らの驚きは、わたしという者の中に巨匠を発見したと思つてゐる現在の驚きより、なおいっそう大きいだらう。いまはまだわたしのほかには、誰もあの絵のほんとうの創作者を知つていない。しかし、かりにいまわたしが、この創作者がその片意地な匿名を破棄するかも知れんという危険をも覚悟した上で、彼の作品の榮譽を自分のものにしようと思ふでいるにしても、わたしはその危険そのものよりも、はるかに強力にそれを阻止する声を、自身自身のうちに聞いているのだ。それゆゑこれは

どうしても明かさなくてはならぬ。明日よりもむしろきょう——わたしがけつしてその作者ではないということを」

これがかたいこの激しい興奮に捉えられてゐる男の考えに近かつた。けれども、その最後の点に關しては、まだはっきりと心が決まつたわけではなかつた。で、きょうまでは彼は知人たちの意見を肯定するでもなく否定するでもなく、あやふやな諧謔を弄しながらどつちつかずの態度を採つて、ずるずる未解決の状態をつづけて来たのであつたが、いまようやく彼はこう思案したのである。自分はなおしばらく適當な時期まで説明を控えても自分の良心に恥じはしない、後になつてもし必要があれば自分の態度を堂々と申し開きしよう。

ちやうどそのとき、若い夫人がふたたび姿を現わした。彼女は夫にただならぬ興奮の色を認めて、驚いてわけをたずねた。画家はそんなことはないのだと否定して、いつにない熱烈さで彼女を抱擁した。そしておのが部屋へ退いた。

数週間たった。その間、われわれの親愛な画家は何びとにもほんとうの事情を明かさなかつた。いや、その唯一の例外となつた相手は、彼の義理の兄弟であるフォン・R少佐であつた。すなわち画家は少佐に次のような異常な告白を行なつたのだ。

「それ以来、やがてもう一年にならうとしてい

る。ある夕方のことだつた。一人の無頼漢めいた男がわたしを画室に訪ねて来た。弱々しい姿、病身らしい容貌の持ち主で、ひよろ長い、吹けば飛ぶような瘠せ男だ。自分は絵の熱心な愛好者だ、そう言つて現われたのだ。しかしそのふるまいの軽々しさ、芸術上の事に関する談話の混乱ぶりは、いかにもうさん臭いものであつた。およそ彼の訪問そのものが不快な、得体の知れないものであつたのだ。わたしは彼を、少なくとも出しやばりの饒舌家と見なした。ことによつたらほうぼうの家を歩き回つて窃盜や詐欺を事とする悪者ではないかとさえ考えた。ところが彼が二、三枚の絵を取り出し、それを非常にへりくだつた態度で自分のつまらない手ずさびだと言ひながらわたしに見せたときのわたしの驚きはどんなだつたらう。それは鉛筆とチョークで見事に仕上げられた生氣と力に充ちたスケッチだつた。わたしは感嘆の色を故意に押しかくして、まず相手の人物を探り、それが他人の所産でないかどうかを確かめようとした。彼はわたしの疑ひに気がついたらしく、屈辱を感じたらしい微笑を浮かべてそれらの画紙をもとどおりに巻いた。同時にふと彼の視線は壁にとまてかけてあつたわたしの描きかけの画板にとまつた。そしてついさきほど彼が口にした一、二の言説がこの上もなくばけた笑止なもの、聞こえたのに反し、わたしはいま彼が何気なく言つたいくつかの重要性のある寸言にまつたく驚かされてしまつたのだ。わたしはそれらの言葉を永久に忘れることはあるまい。というの

これはわたしの技法の特性を実にみごとに言い当てる、わたしが今までおぼろげにしか感じていなかったある欠点の核心をわたしに解明してくれたからだ。しかしこの奇妙な男はわたしの驚きを顧みようとしなかった。彼は立ち上がって帽子を取ろうとした。わたしはたまりかねて激しく彼の手をひっぱってわたしのそばの椅子に坐らせ、もつときみの意見を聞かしてくれと促した。

しかしこの男の意見の述べ方といったら、どんなに奇妙なものであつたらう。それはどう言い現わしたらいいか、とても説明のしようがないのだ。気の抜けた無意味きわまる饒舌のなかに、おりおり極度に鋭利な明察の光がひらめく。それを彼は甘つたるいつぶやき声でわたしに説いて聞かせるのだ。それらのすべてを綜合し、さらにまた、きわめて所を得ないくすくす笑い（それによつて彼は彼自身と、また言わばわたしをあざわらっているように思われた）から判断して、現在わたしが今まで逢つた中での最も異常な偏執性の実例を目のあたりにしているのだということには、もはや少しも疑いを容れる余地がなかった。わたしは彼をささぎって談話を通常の方面に向けた。ところで彼は自分の伊達者気取りの態度がますます得意であるらしかった。その粋がったお上品ぶりは、擦り切れた浅黄の上衣を着て粗末な南京木綿のズボンをはいた見るかげもない外観ときわめて滑稽なあわれな対照をなしているのだ。彼は、あるいはそのきやしゃな指でかなりよこれの見えるシ

ヤツの袖口をひっぱったり、あるいは彼の竹製のステッキをやせた背に沿うてくるくる振りまわしたりした。同時に腕をひっこめることによつて、浅黄の上衣の袖の無残な短さをかくそうと努めた。すべてこれらのふるまいによつて彼はわたしの偽りない同情を惹き起こした。この男は人並みすぐれた才能をもちながら、おそらくは充たされなかった名譽心のために、また、おそらくはだらしのない生活のために、性格破産に陥り、ついにはこのようなたましい形骸だけをとどめるようになったのではあるまいか。それにあの絵は彼自身が告白しているとおり、彼がもつとよい生活を送っていた、ずっと以前の時代に描かれたものなのだ。現在どんな仕事にたずさわっているかという問いに対して、彼は口早にただ、現在私生活を送っている」と答えた。そしてわたしが遠回しにこの数枚の絵を買い取ろうという意図をいしめると、彼は、うわべは様子ぶつた微笑を浮かべているにもかかわらず、内心ほつとし、少なからず満悦しただけだった。わたしは彼に金貨三ドゥカーテンを提示した。それを彼は、近いうちにふたたびわたしを訪ねると約束しながら、受け取つたのだ。

一月後に彼はふたたび現われた。そして以前よりはずっとよい服装をしていた。彼は何枚かのスケッチを携えて来た。それはおそろくいっそう興趣の深いいっそう生彩のあるものといつてよかつた。しかしわたしは彼のやっているこのような一種の商売がはたして潔白で適法なものであるかどうかをはっきり確かめるまでは、

しばらく彼から買ひとめることはやめようと決心していたのだ。で、それを確かめるために、わたしは何気ない口実を設けて彼に一つの課題を与え、その課題を彼がいればわたしの眼の前で解くように仕向けようと考えた。わたしはその目的のためにわたしの考案した画想を短い文章に書きとめておいた。また直接言葉によつてそれを説明した。すると彼は言下に、二、三日後にはその結果をわたしに見せることができましようと言ひながら、急いでわたしのものを去った。しかしわたしの喜びを想像しにくれたまふ次の日の夕方にはもう、題材をスタチウス（古代マケドニアの詩人）に採つた指示どおりの群像が、この上もない立派なデッサンとしてわたしの眼前に提出されたのだ。しかもテーマの把握の仕方はいふまでもなく、わたしの全想像力が今まで達したよりもはるかに大胆な、巧みを極めたものであつた。その上この愚かしい男の断片的ないくつかの言葉も、彼が身も心も絵に憑かれた人間であることを、疑問の余地なく立証していた。このデッサン、それからそれに引きつづいて他の一枚二枚も、わたしは所有となつた。しかし急にこの訪客は姿を見えなくなつた。そしてまことに風変わりな話だが、彼は名前もそれに代わるべきアドレスも、わたしに知らせてはおかなかったのだ。しだいにわたしはわたしを襲う欲望に抵抗することができなくなつた。そして手もとにあるそのデッサンを三、四点、拡大してあらたに水彩画に描き直し、それからまたすぐ油絵に仕上げた。ところでも

なくそこにはわたしの技法とあの見知らぬ男の鬼才との、愛情に充ちた相互滲透が生じたのだ、だからすつかりできあがった画面において、この二重の功績を別々に扱って比較考量しようということになったら、その裁定はけつして容易なことではあるまい。友人であり義理の兄弟であるきみには、わたしもこんな得意げな自認の口吻を洩らしても許してもらえらるだろう。そしておそらく公衆も、近い将来にわたしがこれらの絵を展覧会において公表し、その起源の二重性をいっさいありのままに告げたら、やはりわたしにたいして公平な評価をしてくれるだろうと思う。公衆にいっさいを發表すること、これこそ最初からわたしの確乎たる決心であったのだ」

「それはいかにもきみらしいことだ」と、今まで熱心に耳を傾けていた少佐は言葉をかえした。「きみほどの名声を得ている芸術家なら、そのような公明正大な態度をとるのに、けつして大きい断念の苦しみはともなっていないまいと、ぼくは思う。それどころじゃない、世間はきみの態度の中に、きみがわざわざ身を低めてその無名の才能を評価し尊重しようとしたそのおとな謙虚さを認めるだろう。だが、話をまたそのあわれな先生に戻すことにして、きみはじゃ、それからその男をどうしても発見することはできないのか」

「どうしても発見できないのだ。一度、うちの召使がその男の跡を嗅ぎつけたと言つて来たことがある。しかしまた見失つてしまったのだ」

「悪魔の一味でないかぎり」と少佐は叫んだ。「ぼくはぼくの仲間を使つてかならずその男を探し出してみせる。万事ぼくにまかせておけ。事件はこのまま未解決にしておくにはあまりに奇妙だ。もしぼくが二十四日以内にその男をきみのところにひっぱつて来なかつたら、きみは全世界に対してこのぼくをその不思議な狂人だと公表するがいい。いや、どつかの屋根裏か、泥棒の巣か、それとも癲狂院か、かならずそいつを突きとめてお目にかけることにする」

その二十四日がまだ経たないうちに、ティルゼンは事件の真相を、まったく思いも及ばなかつた道筋によつてすつかり知ることができたのである。

ある朝ティルゼンの留守中に、一人の身装のいやしくない若者が彼を訪れた。で夫人はさしあたり彼を次の間に導き、そこで夫の帰りを待たせらうことにした。夫人は非凡な内性を思わせる、そしてこの上もなく優雅なこの客の顔貌に少なからず興味を惹かれたが、しかしすぐにその部屋を出て彼をひとりのままにしておいた。というのは彼の面に浮かんでいる放心したような不安の色が、これ以上彼に言葉をかけるのはふさわしくないことを、十分彼女に告げたからである。十五分ほど経つて、やつと画家はその小室にはいつて来た。彼は、その若者が両手を頭にやつてじつと思案にふけりながら椅子

にかけているのを見た。扉口からはいつて来た画家のほうには背を見せ、壁にかかっている大きな絵に向かいあつていた。その絵は、幅広の金の額縁の一部を見せてすつかり布によつておわれていたのであつた。画家は多少いぶかしさを感じながら無言で客に近づいた。と、こちらはそれに気がつき、びつくりして起ち上がった。同時にそのいかにも好感のもてる狼狽した優しい顔色のかげに涙をつつみかくそうとした。明らかに彼は涙を浮かべているところを不意打ちされたのだ。

「わたくしは」と彼はいま、はればれとした率直な態度で語りはじめた。「わたくしはこの上もなく奇妙な、同時にこの上もなく悦ばしい事情のためにあなたの前に現われた者です。尊敬するお方、わたくしという者をあなたはご承知ではございません。けれどもあなたは、わたくしの思い違いでなければ、わたくしのものつほんとうのものをはつきりお知りになっており、そのうへ或る程度までそれに愛情をお持ちになっておられるのです、それゆえわたくしは失礼もかえりみず制えきれない信頼の心をもつて参上した次第です。もう何もかもはつきりと申し上げます。わたくしはテオバルト・ノルテンと申します。そしてこの町でほとんど人に知られず絵を学んでおる者でございます。ところでわたくしは昨日あの画廊の展示で多くの絵の中に犠牲のポリクセナ（ギリシャ神話、トロヤ王プリアムスと姫ヤシスとの間に生れた娘。アキレスに恋されトロヤ陥落後アキレスの霊の願ひに）を現わした一枚の絵を見つけた。ひと目見るなり、わたくしと切

つても切れない自己の一部のような親しい世界として、それがわたくしの心にとびこんだのでした。まるで魔法によって昔の夢がいきいきとした姿を与えられて目の前に現われたような、くらくらとよめくような気持。この苦悩に充ちた王女がまるで姉妹のようにわたくしに挨拶するように思われました。彼女を取り巻く景色もわたくしにはどうしても未知のものではないと思われるのでした。けれどその絵の全体の上には、わたくしの内部から発したのではない、より高い力、オリンブの神々から直接授かったと思われるような一つの光、一つの不思議な美が、注がれているのです。わたくしはおののきました、偽りではありません。わたくしは——

「え？ それでは」とティルゼンは彼をさえぎった。「もしやあなたは——いや、あなたは確かにあの驚嘆すべき芸術家にちがいない。あなたにわたしは深く深く有しを乞わなければなりません——」

「とんでもない」と青年は火のように熱烈な言葉で答えた。「いいえ。あなたにどんなに感謝しても感謝しきれない素晴らしい画家、それがわたくしの正体でございます。ああ、気高いお方あなたはわたくし自身にわたくしの姿を現わしてくださったのです、わたくしをはるかわたくし以上の者に高めてくださったのです。わたくしが自分の力に対して疑いをもちはじめようとしていたときに、あなたは親切なお手によってわたくしを暗鬱な無力の状態から呼び醒まし、

わたくしを日輪かがやく芸術の高みにまで引き上げてくださったのです。一人のみじめな男がわたくしの描いたものを盗んだおかげで、あなたがわたくしに、あなたの澄んだ鏡に映してわたくしのほんとうの姿、わたくしの未来の姿を示してくださる機会が生まれたのでした。ではどうぞあなたの弟子を慈父のようなあなたの胸に迎えてください。接吻をお許しください、わたくしの本性のもつれている糸にこれから永久に正しい秩序を与えてくださるその落ち着きに充ちたお手に——その救いのお手に！ ああ、先生！」

こうして二人はしばししっかりと互いの腕に抱かれたのである。そしてこの瞬間から強い激しい友情が結ばれた、それは一般に、生涯においてはじめて出会ったふたりの人物の間において、こんなに短い時間にはほとんど起こりえないであろうような強い友情であった。

「友よ、わたしがまず」とティルゼンが言った。「あなたより先に分別めいた言葉を吐くことを咎めないでください。わたしは、あなたの心からの好意に充ちた言葉によって、自分が恥ずかしく感じたのか、それとも嬉しく感じたのか、まだ十分にはわかっていないのです。あなたはわたしを、時の経つにつれ、もっとよく理解してくださるようになると思います。で、さしあたりあの盗賊のような男にはどういう事情がまわっているのか、それだけを話していただきたい。少なくともわたしは二人を結びつけたという功績はあの男にも認めてやらなければならないでしょうが」

「ごもっともです。お聞きください。もう一年以上も前のことです。が、わたくしがイタリアから帰って来まして、それからこの都市へ来ようとした途中で——と申ししましてもわたくしはこの都市にただ一人の知人もあるわけではなかったのです——わたくしは一人ののらくら者に出会いました、そいつは商売は床屋で、ウィスベルと名のつておりました。——この男が従僕として使ってくれとわたくしに申し込んだのです、わたくしは彼の風変わりな点に滑稽味を感じて彼を使うことにしました。それにその男はいわば何でも屋の熱狂性といったようなもの、そしていかにも床屋らしい高慢ききな態度のほかに、いつも一種の善良な氣質を現わしていましたので、よい彼の望みを容れる気持になったのです。ところでその善良さは、いつもわたくしの信頼を裏切りはしませんでした、しかししだいに彼のきわめて愚かしい虚栄心にだけは征服されてしまったのでした。つまり彼がわたくしの画稿をごまかしてあのようなことをしましたのも、はじめはただ、あなたの前に出てひとかどの顔がしてみたいというそれだけの気持から出ているにすぎなかったのです。そのことはほとんど断言的に申し上げることができると思います」

「けれどあの男は金を受け取って行きました——」

「それにしてもやはりそうです。そのほうの気持は、あなたの申し出によって彼の心に呼び醒

まされたに違いありません」

「しかしあの男の態度はまったく道化じみていましたよ」

「わたしは彼が金を目当てにしてやったのだとはどうも信じられません、かりにそれを目当てにしたとしても、それは彼があなたのお顔にそういう疑いの色を読みとってからのことにちがいないと思います。彼の愚かさには、一方ほとんどそれに劣らぬずるさが伴っているのですから。たとえば彼は実にうまい口実を使つてわたしに即席の絵を描かししてしまいました、その絵も今考えますと無論あなたのとこに持ちこむことが、目的だったのです。それにわたくしも、言葉巧みに美しく述べ立てられた題材のためについ釣りこまれてしまったのです。また彼がいかにも教養のある振りをしてあなたのお目をくらましたといえますと、わたしは今さらながらなるほどと合点が行きます、おり友人が訪ねて来てわたしどもがさまざまな話をしておりますと、彼はいつも用ありげに部屋の中でこそそそやっていたものでした。そんなやり方で彼はあなたにさぞいろいろな消化な知ったかぶりを浴びせかけたことと思えます」

「ああ」と言つて、ティルゼンは多少の羞恥を感じないわけには行かなかつた。「無論その種の言葉は、市場の噴水石などに彫りつけてある象形文字のように、わたしにはいかにもうさん臭く思われました。出典がわからないのですから。しかし実に老獪なやつだ。いったいいまど

こにひそんでいるのでしょうか」

「それは神さまだけがご承知です。半年前に彼は黙つて姿をかくしました。それから数週間のちにわたくしはわたくしの画稿挟みの内容に大きな不足を発見したのでした」

「わたしがその不足をうめあわせましょう」とティルゼンははればれとした様子で言つて、友を覆ひのかかつた絵の前に導いた。「わたしはこれを午前中に公開展覧会に運ばせようと思つていました、しかし今はもうあなたのものです。さあ、この覆ひの蔭にも、あなたはあなたの旧知を見いだすでしょうか」

ノルテンは画家の手を制して次のような告白をした。誘惑に抗しかねて自分は先ほどその覆ひを少しばかり開けて見たのだ、しかし自分自身の分身に出会つたように驚愕してすぐまたそれを下してしまつた、全体を見る勇氣はとてまなかつたのだと。

さて今ティルゼンは一度にさつと幕を取つた。そして側へさがつてその作が画家にどんな印象を与えるかを熟視した。青年芸術家の胸に湧き上がつた名状しがたい感情を、われわれはくどくど述べようとは思わない。ただ前にあの老男爵の話によつて概念を与えられたあの不可思議な幽霊音楽会を読者に想起していただきたいだけである。深い感動と厳肅な気分の中に二人の友は別れた。

さて以上の経過をかなり詳しく物語つたのは、今やこの青年画家を訪れるに至つた幸運の急速なよろこばしい展開をよりよく理解するため、ぜひとも必要な前提であつたからである。彼は世の榮譽を求めず才能をつみかくして、他日より高度の完全性を得て登場できる日を待つていたのであつた。今まで彼にそういう態度を採らせていたものが、一種の小心ないしわがまま、捉え所のない或る気まぐれな主義であつたにしても、油絵具の使用が今まで彼に大い困難を課していたということだけは、否定できない事実であつた。もつともティルゼンが洞察したとおり、われわれの謙遜な主人公がいわばみずから思いこんでいたほどには、それはそんな重大な困難ではなかつたのであるが。ところで今やティルゼンはこの点でも青年画家の習作に驚くばかりの進歩を見いだした。それで彼はよろこんで、この後進を助けるために、細かく骨を伝えようと決心したのであつた。いくばくもなくノルテンは技巧に関してはあらゆる卓越した芸術家と肩を並べ、その高邁な精神においては万人をぬきこんでいた。彼の制作ならびにティルゼンの推輓はきわめて有力な人々との交際の門戸を彼に開いた。そして特に、王の同胞アドルフ公爵は早くも親交深い彼の保護者の一人となつたのである。

こういうふうにしてテオバルトは、今までとは一変した輝かしい生活に幾分みずからも驚き、最初のうちは狼狽な味でさえあつたのだが、時の経つにつれて、自分が実に容易に新しい現在

の境遇に慣れ、またその境遇にふさわしく他に伍して行きつつあることを顧みて、ほとんどより以上の驚きを感じるのであった。もともと彼は人々が特別に彼に対して示す敬意を、ただ当然のこととして受け取りさえすればよかったのだ。そうすれば他人の敬意はまたきわめて自然に彼に注がれて来たのである。

公爵の仲介で彼はツァーリン伯爵家にも迎えられることになった。ツァーリン伯は特別の見識はなく、一部の人たちの主張する所によれば単なる虚栄から、各種類の芸術の熱心な理解者としての評判を博している人であったが、実際の評判にたがわずその周囲には多くのすぐれた人物や淑女が集っていた。そしてその集いにおいてはあらゆる種類の精神的楽しみ、なかなく優れた詩人の作品の朗読が行なわれていた。しかしこの会合全体に生命を与えた中心的存在は、本人の求めたことではなくおのずからにして、伯爵の美しい令妹、数年前に将官である夫を失った若い寡婦、コンスタンツェ・フォン・アルモンドであった。彼女の愛らしさは、もし彼女が望むならば、そこに集まる男子の全群を支配しその法を立てることもできたであろう。しかしこのやさしい婦人は、彼女の存在そのものから流れ出たおのずからすべての人々に感化を及ぼす穏和な影響に満足していたのである。その影響は、個々の人だけにとどまらず、おしなべて一座の人が談話の主題やそのときどきの催し事などにたいして示す活潑な関心の持ち方に、明瞭に現われていた。いな、コンスタンツ

ェの影響はけっしてその程度にはとどまらなかった、彼女は、紳士たちがあからさまに彼女を一座の女王と呼ぶその帰依の熱情をそらすためには、しばしば彼女生来のいきいきとした心の流露を抑制せねばならぬように見受けられた。テオバルトも、ひそかに彼女に心惹かれるのを感じた、そして毎週三晩彼女のほど近くにいて過ごすことのできたひと月半ほどの間に、その晴れやかな好意は、彼が自分自身の心にも告白することを許されぬほどの強い愛情に変わって行った。天成の美とやさしさ、高雅な教養、加うるに彼の生命とする絵画に対する活潑な興味、みずから画筆を採るほどのつよい関心は、彼女を彼女の熱情的な崇拜者にしてしまったのである。そして彼の理性は、外的事情をごく表面的に考えただけでも彼の分を越えた願いのすべてを打ち砕いたのではあったが、しかも彼は一方においては、彼に對する彼女の特別な好意のかすかな痕跡のいくつかを、倦むことのない熱烈で自分に都合よく解釈しては、それを反芻していたのである。その際は無論、あのアドルフ公爵を非常に才気ある競争者として怖れなければならぬことを忘れるわけには行かなかった。いな、公爵は交際しようずと巧みに人の心を捉える談話の調子にかけてははるかに彼を凌駕していたのである。公爵の情熱はテオバルトにとってはいよいよ彼の心を圧迫する種となった。それがなければ公爵と彼との関係はどんなに親密になりえたかも知れないのであるから。ところが今はテオバルトは、なんの悪意もないこの高

位の友にたいして、ひそかな心内の緊迫をただかろうじて押しとめているにすぎなかった。

それに彼には、このいや増して来る恋の思いを自分でもできるかぎり軽く見ようとすると一つ別の理由があった。というのはかつて結ばれた一つの縁が、今もなお彼の心情に、物静かにではあったがその権利を主張していたからである。その主張の正当さを彼は否定しきることではできなかった、もともと一方では、彼は多少の良心の痛みを覚えながら、すでに断乎その権利の呼びかけを受けつけぬ態度を採りはじめていたのであるが。世の塵に汚されぬ青年が、無垢な清い乙女にたいする愛によつてはじめて味わうことのできたあの純粋な幸福は、このころ、ある不幸な事情によつて掻きみだされ暗影を与えられていたのだ。そして彼の感じやすい心は、その事情のために、すぐに疑惑と邪推を抱くようになったのである。相当に理由もあるだけその感情はいっそう執拗なものであった。実際彼は遠方に住んでいるその乙女にもう一語半句の便りもせず、彼女にたいしこういう変化の理由さえ知らさぬ状態にあるらしかった。癒やしがたい心の傷手によつて彼はすぐかたくなに次のように思いこんでしまったのである。この美しい縁の貴い地盤は永久にくつがえされてしまったのだ、おそらく自分はこの傷つけられ辱められた意識の苦さによつて、自分のうちに残る彼女へのあらゆる思慕の根を絶ち切ることができらるう、自分はまだしもそれを自分の幸福として感謝しなければならぬのだと。また実